

12月2日 待降節第1主日

イザ 2:1～5 ロマ 13:11～14 マタ 24:37～44

1. マタ

私たちキリスト者は、人の子なる主イエス・キリストが来られる救いの日を待っている民です。その日のために「目を覚ましていなさい」(v.42)、「用意していなさい」(v.44)という呼びかけを、全世界の教会が今朝の福音書の朗読を通して聞いています。このようにして、新しい典礼暦の一年が今年も始まりました。典礼暦の一年は、来たり給う再臨のキリストを待つことから始まります。

キリストの福音の終末的使信(メッセージ)を、代々の教会は繰り返し待降節の主日の日課の朗読を通して聞いて来ました。それは切り離された個人にではなくて、共にミサをささげる群である教会に対しての呼びかけであると、伝統的に理解されて来ました。ここに私たちにとっての待降節の意味があります。待降節はクリスマスへの準備以上のものです。それは来たり給う再臨のキリストを迎える用意を、ミサに集まる群に向かって呼びかける特別な期節であるということが出来ます。

しかし、それは信仰によってだけ出来る用意であって、世の中が変化してそのような必要を人々に感じさせる時代が来るというようなものではありません。東西文明の対立も、飢餓や貧困も、自然破壊も、その他どのようなこの世の問題も、キリストの福音の終末的使信(メッセージ)と直接に関わることはありません。私たちは福音のメッセージとこの世のメッセージとを混同してはならないのです。

vv.37-39 「人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。……洪水が襲って来て一人残らずさうまで、(人々は)何も気がつかなかった。人の子が来る場合も、このようである。」

2. イザ

この世の歴史には終わりがあり、終わりの日は新しい世(アイオーン)の開始であるという理解が、キリストの福音の根底を貫いています。神の国はやがて来る新しい世(アイオーン)であり、いわゆる“永遠の命”とはこの新しい世(アイオーン)の命のことです。

v.2の「終わりの日」とは、そのような歴史の目標である“新しい世の到来の日”のことであると理解しましょう。

美しい幻を語るv.4が、戦争放棄や平和主義の理想を鼓舞するために、そのような運動家たちによってしばしば引用されて来ました。しかし誤解してならないのは、イザヤ書はここで決して平和主義を標榜したり啓蒙したりしているのではないということです。「終わりの日」は神の摂理の御手の中であって、新しい世(アイオーン)の平和は主の教えへの服従と共に神が実現されるのです。人間が作り出す平和ではなくて、神が実現される新しい世(アイオーン)を待ち望んで歩もうと、v.5はイスラエルの民に呼びかけています。

このイスラエルの民への預言者イザヤの呼びかけを、今朝私たちはミサの中で聞いているのです。今年

も待降節のミサから新しい一年を歩み始める私たちは、代々の時代のキリスト者たちと共に、やがて神の国に復活する「多くの民」(v.3)の中に加えられているのだということを、感謝をもって信じましょう。

3. ロマ

確かに「今や、わたしたちが信仰に入った頃よりも、救いは近づいて」(v.11) います。「夜は更け、日は近づいた。」(v.12) すべてのキリスト者にとって、「あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。」(v.11) これが待降節第一主日のメッセージです。

このメッセージを聞くことなしに、いつの時代の教会もその典礼暦の新しい一年を歩み始めることはありませんでした。そしてこれから後も、待降節第一主日にその時代の教会は、この同じメッセージをずっと聞き続けて行くのです。主イエス・キリストが来られ、神の国が実現するその日まで。

マラナ・タ、アーメン。

12月9日 待降節第2主日

イザ 11:1~10 ロマ 15:4~9 マタ 3:1~12

1. マタ

使徒たちによって伝えられた主イエス・キリストについての宣教(ケリュグマ)は、洗礼者ヨハネの出現の物語りから始まっています(使 1:21-22, 10:36-37)。私たちはそのことによって、主イエス・キリストの受難と復活に至る受肉とその生涯を、神の救済史の中で理解することが出来るのです。

洗礼者ヨハネの出現は、イザヤ書 40:3 の預言に従ったものでした。彼の風貌は 王下 1:8 に描かれているエリヤと同じものでした。それは マラキ書 3:23 の預言に従っていました。彼は「主に先立って行き、その道を整え」(ルカ 1:76) るために遣わされました。

彼の授けた洗礼は、「差し迫った神の怒りを免れる」(v.7) ためのものでした。彼の後から来る主イエス・キリストが「来たるべき怒りから私たちを救ってくださる」(1 テサ 1:10) ことを予告し、この方を救い主として受け入れるように準備することが、ヨハネに与えられた仕事でした。彼は「悔い改めにふさわしい実を結べ」(v.8) と教えました。

このように宣教(ケリュグマ)は、それを聞くだけではなくて、キリストを信じて救われることを目指しています。その宣教の初めのところに洗礼者ヨハネは立っているのです。そのようにして彼は、神の国の王として再臨される終末のキリストを指し示しています。

2. イザ

南王国ユダはダビデ王家の国でした。この南王国で新しい王が即位するたび毎に、ヤーウェによるダビデ契約(サム下 7 章、詩 89)が更新され、理想の王の出現が期待されました。ここにイスラエルのメシア待望の起源があります。

ダビデはベツレヘムの町のエッサイという人の息子でした。「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち ……」(v.1) とは、ダビデの子孫から生まれるメシア的な王のことです。その到来の日には「大地は主を知る知識で満たされる」(v.9) ようになるという。私たちはメシア待望の終末的性格を、ここに見ることが出来ます。

待降節第二主日の聖書朗読は、このような神の救済史の将来に人々の目を向けさせます。洗礼者ヨハネは「ダビデの子孫から生まれ」(ロマ 1:3) た御子イエスの公生涯への導入の使者でありつつ(マタ 3:1)、さらに「死者の中からの復活によって力ある神の子と定められた」(ロマ 1:4) 主イエス・キリストの二度目の(ヘブ 9:28)来臨を指し示しているのです。

20 世紀の時代のいわゆる平和主義者たちが、神の国とはこの地上に vv.6-9 のような理想の世界を築き上げる運動であるかのように考えたその名残りが、文書や歌の形で私たちの教会に今も多く残されてい

ます。しかしキリスト(メシア)とその御国は、教会がその出現を待望している終末の希望なのです。

3.

待降節は二重の特質を持っています。それは一方では神の子イエス・キリストのかつての誕生を祝う準備の期節ですが、同時に、会衆をそのかつて受肉された受難と復活のキリストの、終末の再臨に備えさせる期節でもあるのです(典礼暦年と典礼暦に関する一般原則 39)。この“待望”の性格が、待降節と降誕節を区別します。

20世紀に育った現代のキリスト者である私たちは、典礼暦の一年が待降節で始まることを意味を殆ど自覚することなく歩んで来ました。それは前世紀の教会の世俗化に原因があると見てよいでしょう。既に久しく待降節と降誕節の主題はキリストの降誕と来臨ではなくて、サンタクロースとクリスマスプレゼントでした。

しかしどんなに世の中が変化し、人々の心が神よりも世俗のことの方に向かって行ったとしても、それでもなお、カトリック教会は今年も待降節の主日の聖書朗読によって、差し迫った神の怒りから私たちを救ってくださるキリストの来臨を待望することを呼びかけられています。「悔い改めにふさわしい実を結べ」(v.8)とは、実に21世紀の教会の出発点に立っている私たちへの神のことばなのです。

アーメン、ハレルヤ。

12月16日 待降節第3主日

イザ 35:1~6,10 ヤコ 5:7~10 マタ 11:2~11

1. マタ

待降節第三主日の福音書は、ヨハネに関するイエスの証言を取り上げています。ヨハネはガリラヤの領主ヘロデ(ルカ 3:1)に捕えられて、牢の中にいました。彼は思い惑っていました。彼はくずおれ、うめき、悩んでいました。神が理解出来なくなっていました。

v.3 「来たるべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」

彼は伝説的な英雄としてではなくて、21世紀を歩み始めたキリスト教会の会衆である私たちに不思議なほど似かよった姿で、ここに立っています。

しかし今朝の福音書のテキストはこのヨハネを、「そうだ。言うておく。預言者以上の者である。……と書いてあるのは(マラ 3:1)、この人のことだ」(v.9-10)と証言される主イエス・キリストを、私たちに見せてくれるのです。主イエスが「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい」(v.4)と答えられたとき、それは彼自身のメシア的任務の明確な証しを意味していました。ですから待降節第三主日の福音書は、むしろ実際には、約束されたメシアとしての主イエスを証言しているのだということが出来ます。

20世紀のキリスト教会は、信仰についても福音についても、“目の見えない”“耳の聞こえない”教会でありました。“キリストの愛”、“キリストの救い”、“キリストの福音”とは何なのかが分からなくなってしまっ、しかも“分らない”と正直に言う勇氣に欠けていたのが20世紀のキリスト信者たちでありました。そして私たちは皆、“何となく分っているような気分”で自らを取り繕って来たのでした。

ヨハネを閉じ込めている牢、悪魔のような領主ヘロデの力、そして彼の人生の悲痛な結末(マタ 14:1-12)は、変えることの出来ない事実であったことを私たちは知っています。彼は自分の気持ちを“何となく分っているような気分”で取り繕うことをしませんでした。彼は自分の失望の大きな苦しみの中で尋ねたのでした。

v.3 「来たるべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」

そしてそこには約束のメシア・イエスが来ておられました。神の国は近づいて来ており、救いの御業は確実に進行していたのでした。

現代のキリスト者である私たちも心の中で、“キリストの救いがよく分らない”と叫んでいます。ヨハネにもそれが分りませんでした。しかしそれにもかかわらず、メシア・イエスは既に来ておられました。そのように21世紀の初頭に立つ私たち教会にとって、「主が(再び)来られる時が迫っている」(ヤコ 5:8)のです。

2. イザ

ヤーウエの救いの到来を語るイザヤの預言の特徴は、大自然の突然の変化を伴うものとしてそれが述べ

られていることです。砂漠に花が咲き、主の栄光が現れると、主の民の人々の弱った手とよろめく膝が強くされ、その心からは恐れが取り去られて神とその救いを見るようになります。「そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く」(v.5) のです。それは終末的な救いを指し示していました。

しかし、主イエス・キリストが受肉して「わたしたちの間に宿られた」(ヨハ1:14) とき、このメシア時代の開始の栄光が現れました。それは“未だ将来のこと”ではなくて“今既に開始されたこと”となったのでした。

3. ヤコ

v.7 「兄弟たち、主が来られるときまで忍耐しなさい。」

それは“信じて待つ”ということです。既に実現した主イエス・キリストによる救いを信じて、神の国への復活の日の到来を待つということです。「洗礼によってキリストの死に結ばれた者が、その復活にも結ばれることができますように」(第二奉獻文) と祈り続けていくことの大切さを思い出しましょう。

4. マタ

20世紀の後半は、世界中のキリスト教会がひたすらに下降線をたどって無力になって行った時代でした。信者の数は減り、ミサは寂しくなっていました。司祭の老齢化は進み、後継者となるべき次の世代の献身者は非常に珍しくなりました。21世紀の初頭の教会の現状は、そのようなものです。

牢の中のヨハネのように、失望の大きな苦しみの中にあって現状をいささかも改善し得ないでいる21世紀の教会に向かって、今朝主イエス・キリストは語っておられます。

v.5 「目の見えない人は見え、…… 耳の聞こえない人は聞こえ、…… 貧しい人は福音を告げ知らされている。」

私たちのただ中で、キリストの福音に耳が開き、キリストの救いに信仰の目が開く人々を、父なる神の右の座に着きやがて来たり給うキリストが起こしてくださっている…… ということ信じることこそが、21世紀の教会への希望なのです。 アーメン、ハレルヤ。

12月23日 待降節第4主日

イザ 7:10～14 ロマ 1:1～7 マタ 1:18～24

1. イザ

預言者イザヤの活動の初期における最大の事件が、このアハズ王との会見でありました。アラムの王レツインと北イスラエルの王ベカが連合して、エルサレムに攻めて来ていました。そして、南王国ユダに隣接するエフライムまでもがアラムと同盟したという知らせが伝わって来ました。ユダの形勢は全く絶望的でした。預言者イザヤはアハズに会い、「落ち着いて、静かにしていなさい。恐れることはない」(v.4)と告げました。しかしアハズ王は聞き入れませんでした。彼は敬虔を装って、勧められた主のしるしを求めませんでした(v.12)。恐らく彼がアッシリアの王の助けを求めて送った使者は、既にその途上にあつたからと思われる(王下 16:7 以下)。そのときに語ったイザヤの預言が、これでありました。

v.14 「それゆえ、わたしの主が御自ら、あなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」

イザヤは、ヤーウェのダビデ王に対する約束への希望を指し示したのだと、そう私たちは考えています(イザ 9:1-6, 11:1-5 参照)。

2. マタ

v.23 のイザヤ書の引用と、v.20 の「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである」との呼びかけによって、私たちは神の福音(ロマ 1:1)の神秘の前に立っていることに気付かされます。「この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので、御子の関するものです。」(ロマ 1:2)

20世紀の教会では、「主は聖霊によって人となり、おとめマリアから生まれ」(使徒信条)という神秘をもはや理解せず、尊重もしない考え方が事実上の常識となっていました。少なくとも真面目な信者がこの信条の一節の前でだけは躊躇してしまって、喜びではなくて困惑を感じて来たということは事実です。

にもかかわらず今朝、21世紀最初の待降節第四主日を迎えた全世界のカトリック教会(およびその他の多くの諸教会)が、この同じ福音の朗読を再び聞いていることに、私たちは感謝したいのです。典礼暦と主日の聖書朗読配分が、使徒継承の器でもある古代教会の信条と共に、21世紀のキリスト者会衆の目を再び正しく神の福音の出来事の神秘に向けさせようとしているのです。

現行のカトリック教会のミサの式次第には、「洗礼式の信仰宣言」「使徒信条」「ニケア・コンスタンチノーブル信条」の三つが掲載されています。特に第三のニケア・コンスタンチノーブル信条は、これを後に改めて批准して権威づけたカルケドン会議(451年)の信条と共に、神の子の受肉の神秘を最も明確に宣言しています。

v.20 「マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。」

我らの主イエス・キリストは「まことの神よりのまことの神」であります。しかも、……

v.21 「マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」

唯一の主イエス・キリストは、「おとめマリアより御からだを受け、人となりたまえり」なのです。これをカルケドン信条は「まことの神にしてまことの人」と宣言しました。

これらの古代教会の信条形成の過程で、神の福音の神秘を“人間的に理解できる説明”によって合理化しようとするあらゆる異端との熾烈な戦いがあったことを、21世紀の教会は再び思い起こすべきです。古代教会は神の福音の神秘を説明することではなくて、その神秘を神の御業として直視することを大切に考えました。信じようとしなない人は去るがよい……、しかしすべてのキリスト者は、神の御業であるクリスマス神秘を直視しなければならない。そのためにこそ古代教会の神学者たちのあのような非常な労苦が払われて、信条が生み出されたのでした。

3. ロマ

w.3-4 「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです。」

私たちが間もなくその誕生と公現を祝う御子イエス・キリストは、既に死者の中から復活して私たちのミサで御自身の祭壇に天から降って来られる方と同じキリストであり、やがて私たちを御自身の復活の栄光にも与らせてくださる方であることを覚えて、感謝しようではありませんか。

アーメン、ハレルヤ。

12月25日 主の降誕

イザ 52:7~10 ヘブ 1:1~6 ヨハ 1:1~18

1. ヨハ

クリスマスは、父の独り子である神の降誕の祝いです。神の子が受肉して、私たち人間の世に宿られました。この方が私たちの救い主イエス・キリストです。御自身をいけにえとして献げて永遠の贖いを成し遂げられた後、父なる神の右の座にお着きになった御子イエスのかつての降誕を、今年も私たちは祝っているのです。

主イエス・キリストによって救われて神の子となった人々の群が、全世界の教会でクリスマスのミサをささげています。

vv.12-13 「しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。」

2. ヘブ

私たちの人生において、ほんとうに重大な問題とは何でしょうか。クリスマスのミサに参加することも大切ではあるが、それと並んで、あるいはそれとは別に多くの重大な問題があるように見えます。何がほんとうにいちばん重大なのかを判断出来ずに迷っているのが、現実の姿なのではないでしょうか。

vv.1-2 「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。」

私たちが歩んで来た20世紀は、神のことが隠されており(マタ 25:25)、覆われており(II コリ 4:3)、埋められていた(マタ 13:44)時代でありました。神のことは、宝を鉱山から掘り出すように掘り出されねばなりません。第二バチカン公会議は典礼憲章によって、「信者に神のことは食卓の富を豊かに与えるために、聖書の宝庫を今まで以上に広く開かなければならない」(51)と宣言しました。神が御子の受難と死と復活によって語られた福音の宝を、再び掘り出して信者の食卓に供するために、現在の主日のミサの聖書朗読配分は作成されたのでした。

「二度目には私たちの救いを完成するために現れてくださる」(9:28) 御子イエスの、かつての一度目の降誕を祝う私たちは、この聖書の朗読を通して神のことに耳を傾けます。

3. イザ

主の降誕の祝いは、神の救いの決定的な開始の祝いであることを信じましょう。

v.7 「あなたの神は王となられた。」

ですから、私たちがやがてその復活の栄光に与かるキリストの一度目の降誕を祝うことは、まことに貴い大切な務めなのです。

天に栄光！ 地に平和！ ハレルヤ！

12月30日 聖家族

シラ 3:2-6,12-14 コロ 3:12-21 マタ 2:13-23

1. マタ

神の子が受肉して人間の世界に誕生されると、すぐにこれに敵対する罪の力が幼子イエスに迫って来ました。

v.13 「ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」

マタイ福音書のこの物語りで、父親のヨセフは夢でお告げを受けて、幼子とその母を守るためにエジプトへ逃れます。そしてヘロデの死後イスラエルの地へ戻って来て、ガリラヤの町ナザレに住むことになりました。それら一つ一つの出来事によって旧約聖書の預言が実現して行くと、この物語りは伝えています。

神の救いの御業の展開の一つの場面であるこの物語りの中で、ヨセフは父親としての役割を明確に果たしています。そのような神の御業の器として用いられたヨセフは、マリアと並んで「恵まれた方」(ルカ 1:28) でありました。

聖書は主イエスの家庭の私的な内容については、何一つ伝えていません。そのような事柄についての多くの美化された空想には何の根拠もありません。しかしマタイはこの物語りで、そのように神の御業のために用いられた父親のヨセフがいたことを、私たちに思い起こさせてくれるのです。

2. シラ

このテキストが単に親孝行の美德を教えているのだと、早計に考えてはなりません。旧約聖書において、父はその子に知恵を教えるという特別な役割を持つ者として描かれています。その知恵は「主を畏れること」(1:14) であり、「神から来る知恵」(1:1) でありますから、「主は、子に対する権威を父に授け」(v.2) しました。ですから父を尊ぶ根拠は、主が授けられたその役割にあるのです。

イスラエルの信仰が父親から子らへと代々受け継がれて行くことを、神は良しとされました。イスラエルの民の各家庭で、父親がそのような者として自らの役割を果たすことは、神がそう望まれることであり、また人々が祈り求めて行く課題であったことを、私たちは旧約聖書から知るのであります。そのことを理解して初めて、私たちは今朝のテキストを正しく読むことが出来ます。

v.14 「主は、父親に対するお前の心遣いを忘れず、罪を取り消し、お前を更に高めてくださる。」

3. コロ

私たちが歩んで来た我が国の過去半世紀は、家庭における親の権威が失われて、親自らが子供を教え育てる自信だけでなく自覚までも喪失してしまった時代でした。

そしてそのことは、教会という集団の中でも同様でありました。福音は先輩から後輩へと教え受け継が

